昔宿の坂である夜の出来ごと

羽根田　三　嶋　　敏

木城街道で、どうしても通らなければならない宿の坂七十年余り前のこの坂は、大木がもりもりと繁って、空も見えず、昼間でも暗い程でした。又、夜にでもなると岩を伝って、したたり落るしづくが、水たまりに落ちて、チーン、チーンと、金属性の音がして、それが暗やみの中に響きわたり、まことに無気味な、怪しさが漂よっていました。

今、生きていたら、百歳にもなるという老人が、まだ若い頃の話で、七十年余りも昔のことです。

俺が、まだ若けころん、話しよ。木城ん　親りに　呼ばれち行ったら、いろいろ仰山なこつごっそが出ち、次から次に話しがはずじ、焼酎もしたたか、ぬじょったもんじゃかり、気がちた時きゃ、夜中過ぎ　なちしもた。ごっそや、みやげもんぬば　どっさり　持たせち　くりゃったもんじゃかり、どしゅもならじ　肩にくびっつけち　歩き出たつよの。

そん晩な　月も出ちょらじ、寒みこたさみし、真暗やみの道の　遠いこつ、おまけにだれちょるもんじゃかり、眠みこたねみし、たまらんかったけんどん、一人で、とぼとぼ歩りち来たらとうとう宿の坂んかゝったつよの。近けとこや遠いとこん森じゃ、ふくろんげどが、ホー、ホー、ねちょるし、岩をつとち落つる、おじよな音。人ん気も、ぜんぜんねし、ものすごさみし真のやみじゃったつよね。

すっと、肩ん荷が　えろ

重みなったつよ。上り坂じゃかり、こんげ重みつじゃろか知らん。と思たっじゃけん、そんまゝで、いい加減坂をのぼち、青木が近なった、ちょうど坂ん上で、こんだ肩ん荷が、ひょかつ軽なったつよ。

そりかり、いっときありち、やっと自分げんにたどりちたつよ、そっで、小とぼしゅつけち、肩ん荷をおりちみたら、どしたこつか、ごっそは食い荒されち、目茶苦茶に、なっちょっじゃねか。

そっで、思い当ったわい、宿の坂で、急に肩ん荷が重なち、目の前が、見えんごつなったつよ。キツネんげどが、肩ん飛び上ち、尻っぽで目かくしゅして、ごっそば食い荒したもんじゃったわい。

こりも、キツネに、化かされたこちなるわい

アッハハハハハ……。

と、話してくれました。

幽霊を捕える
（手塚隆吉炉辺談）

蓑江　手塚貞夫

むかし、宮田の三好氏の家の、裏手の方は、竹やぶで、昼でも薄暗い、さみしい所でした。いつの頃からか、幽霊が出るという、うわさがたったので、夜ともなるなると、女子どもは勿論、大人でさえもめったに通らない大変さみしい所でした。

ところが毛作に、大変愉快で、肝っ玉の太い男がいました。たまたま、町へ用事で出かけ、帰りに酒を飲みホロ酔いかげんで帰りはじめました。

丁度、三好氏の裏手にさしかゝった時でした。行手の方向に何か白いものが、フワリ、フワリと、出て来ました。

「ハハーン、これが幽霊かな」

とつぶやきながら、ジーッと見すえていましたが、何しろ肝っ玉の太い男のことですから、近づいてきた、幽霊らしい白いものを、いきなり掴むと、力一杯引きずりおろすと、両手にかかえ、一目散に、わが家に向かって馳け出してしまいました。

わが家に帰って、灯りにかざして見ますと、婦人のかぶる被衣（女の人が、外に出る時かぶる布）だったのです。男はニヤニヤ笑いながら、

「幽霊を捕えて見れば、被衣なり」
と、つぶやきました。
ところが、しばらく時が過ぎた頃です。三好氏の仲間が、男の家に、訪ねてきました。そして
「あなたが持って帰られた、被衣を返して下さい。」
と、頼みました。男は、
「私は、そんなものは知らない。しかし、幽霊ならつかまえているが。」
と、答えますと、
「実は、あなた様が通られるのを知り、二、三人で相談して、被衣を竹の先につるして、おどそうとしたのです。」
「私どもが、悪うございました。どうぞこらえて下さい。」
と、頭を地面につけて、頼みました。そして
「もし、これが私共の主人にわかりますと、家を追い出されてしまいます。」
と、泣きながら、自分達の禍ちをわびるのでした。男は、この者達が可哀想になり、被衣を返してやりました。

その後、この幽霊の出るうわさは、いつの間にか、なくなったそうです。

大蛇がいた話

脇押条磯松

高鍋町上江の、大戸口（谷坂の脇）に、三段構えで造られた、古い池があります。これは、かんがい用のため池として、造られたものですが、現在は利用されていない様です。

ところが、この辺を中心として、野首から牛牧にかけて大蛇が住みついていた、ということです。今、七十才から、八十才代の方々の話では、この話を古老からきいたといわれる人を、二、三に止まらず聞きました。

この大蛇の大きさを確めることは難しいが、大蛇が通った後は、草木がなぎ倒されて、大きな道がついたということです。それ程大きな蛇だったのです。

本気で、この話をしてくれた人々も「私は見た」という人には、会うことが出来ませんでした。

今の若い人達には、話題にもなるまいし、いつの間にか、忘れられることの様に思われます。

※　昭和五十年頃のこと、郷土史家の、中武弘氏が、この付近に探索にいかれた折、突然奥の方で、ザー、ザー、ザー、ザー。と、不気味なすごい音が、聞えてきたのです。

仰天された氏は、とるもとりあえず、そのまゝ急いで帰られ、その後、二度とその付近に足を運ばれたことがないそうです。

「確かに、あれは大蛇でしたよ。」と、豪快な氏も、首をすくめて、語っておられました。

狐に化かされたお坊さん

平原　福　永　ミサオ

大正五、六年頃、覚正寺の房守より聞いた話です。その頃、小丸橋から西小学校の付近までは、大変に広い所で、道といえば、馬車が通るぐらいで、途中には松林が広がり、竹やぶ畑などが、点々と続いていました。人家は、その中に一、二軒で、大変さみしい通りになっており、狐が出るとか、狸が出るとかで、夕方などは、一人では通りたくない所でした。

ある日のことです。川南の門徒の家に、法要にいかれた住職（酒好きで六十四、五才）の帰りが、余りにも遅いので、養母は日暮れ間近になって、迎えに出かけられました。しばらくして、今の水除団地の辺りまで行った時、向こうの方から、着物の裾をお尻りまで高くからげて、背には大きな荷物を負い、そば畑を杖をつきながら住職が歩いてこられたのです。

「マア、そのかっこはよう、尻からげち、畑んまん中を通っちょう。」

と、いって笑われました。坊さんもニヤニヤ笑いながら

「何、おそなちよ、近道ちゅうたら川じゃろ、浅せごたるかり、渡ちきたっじゃが、ホラホラ。」

と、肩の荷物をおろしながら、

「土産が、どっさり入っちょるど。」

と、渡されたが、聞いてみると、衣より外には、何一つなかったのです。びっくりした養母は、

「あらー。狐にだまされたわね。」

と、いうと、お坊さんは、「うーん」とうなって

「そういえば、見ごちりっぱな娘ん

子が、近道を教えち、くれたっちゃが、狐どんじゃったっちゃろかい。がきされがね。」

と、くやしそうに、松林の方を、にらみつけられましたが、もう後の祭で、たくさんの、土産のご馳走は一つもなく、仕方なく母と連れだって、お寺に帰られたということです。

その頃は、今と違って人通りも少なく魚とりにいった帰りにだまされたり又、やぶの中でせっせと、木の葉を体につけている狐を見た人もあったそうです。

奇妙な色合いの大男

新山　山本友治

これは、かなり以前のことです。新山の内村森頼氏から聞いた話です。

まだ新山に、古い小道しか通っていなかった頃、内村さんは、高鍋の町のある店に奉公していました。

ある日の、夜九時ごろのことです。店の用事で、三財原までいって、その帰る途中のことです。

現在の蓑毛員男氏宅と松下光男氏宅の間の、中央当りの路上でのことです。

にわかに雨が、ポトポトと降って来たのです。と、行手の方向に青白い光が、ぼうっと光かっているのです。しかも、玉虫色に輝きながら、だんだんこちらに、近づいてくる気配です。

そこで内村さんは、自転車から降りて、歩きはじめました。しばらく歩いて、もう出会う頃だと思いましたが、すれ違った様子もないのです。

と、思った時、何かが、すれ違った様な気がしたのです。

振り返ってみて、びっくりしました。身の丈七、八尺（二米四十糎位）もあろうかと思われる、雲をつく様な、大男なのです。

大男は、上からジロリと見下しながら、

「三財原には、どの道を行けばよいか、教えてくれ」

と、聞くのです。この道を、こうこういけといったところ、大男は、ゆっくりうなづくと軽く頭を下げ、後はふり向きもせず、大またで歩いて行ったのです。

しかし、何と奇妙な光を発す

る大男なんだろう。内村さんは、もう一度会って見たいと思い、今尚、雨降りの夜には、バイクに乗って出かけているけど、いまだに、会えずにいますよ。

と、語り終わると、カカカ・・・と、高笑いされました。

大蛇がいた

新山　山本友治

昭和三十年の六月頃のことです。

私は朝早く、牛や馬の〃えさ〃にする、草を刈りに出かけました。現在の、新山分取林内（湯風呂）提から、五十米位上の方の谷間で、山合いの小川を、向こうの方に飛び移ろうとした時です。丸太が、川の上に、横倒しになっているので、丁度とよい足場だと思い、飛びのったところ、ふわっとした感じがするとともに、その丸太ん棒が、急に動き出したのです。

びっくりして、よくよく見ると、胴体のさしわたしが、一尺（三〇糎）程の大蛇だったのです。

からだ中の血が、見る見るうちにひき、顔色も　白くなっていくのが、自分でも、はっきりわかるのです。危なく抜けそうな腰に力を入れましたが、ガクガクする足は、どうすることも出来ません。

後はもう、何をどうしたか、ぜんぜん記憶になく、ふるえる全身をこらえながら、後をふり返る勇気もなく、やっとの思いで、家に逃げかえりました。

その後、そこの山には、二度と足を踏み入れたことがありません。思い出しても、身ぶるいするのです。